HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	III. 札幌を「フィールドワーク」する
Author(s)	青木, 麻衣子
Description	【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 18, 41-49
Issue Date	2014-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59647
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU18_05.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Ⅲ．札幌を「フィールドワーク」する

青　木　麻衣子

1．授業開発の背景

この授業「札幌を『フィールドワーク』する」は、新渡戸カレッジの創設に伴う多文化交流科目の新規開講にあわせて、一昨年度（2013年度）に提供を開始した。日本人学生は、他の科目と同様、新渡戸カレッジ生を主に対象としたが、留学生については、ちょうど１年間の交換留学により本学に在籍する日本語・日本文化研修コース（以下、日研コース）の専門科目に一つ空きができることがわかったため、そのコースの在籍者（以下、日研生）向けの授業として開講することとした。

本学では近年、交換留学生の受け入れを年々拡大しているが、日研コースについても、日本関係学部を持つ協定校からの学生をできるだけ公平に受け入れるとの観点から、一定の基準は設けつつも、結果として様々な背景および日本語力の学生にその門戸を開いている。もちろん、すべての学生が、比較的高度な日本語力を要求する専門科目を履修するわけではない。しかし、そもそも本国で日本語を学んでおり日本社会・文化に興味を持っている日研生にとって、日本人学生との共修・交流に対するニーズは高い。一方、日研コースは通常、学部３・４年生対象の交換留学プログラムであるため、主として学部1年生を対象に開講する授業と乗り入れるには、かれらのこれまでの教育経験を強みとできる授業内容にする必要があった。

これらのことから、新たに提供する多文化交流科目では、①日本人学生・留学生が少人数のグループに別れ、②言語にそれほど依存しない協働作業をとおして、③双方の背景のちがいに気づき学び合う活動を主軸とすることを決めた。また、最終成果物も、レポートのみではなく、グループでのポスター作成を含めることとした。さらに、授業の内容は、日本人学生でも大学に入学し初めて札幌に住む学生も半数程度いるとの本学の事情を考慮し、大学が位置する「札幌」を題材としたいと考えた。

授業の準備を進めるにあたり参考としたのは、近年、大学教育にも初年次教育等で盛んに取り入られるようになった「体験型」授業の手法であった。特にフィールドワークの手法をまとめた図書・資料等にあたるなかで[1]、「写真」をうまく活用することにより、特に留学生は、ことばのハン

ディを乗り越え、かれらの異言語・異文化的背景を強みに変えることができるのではないかと考えた。

フィールドワークを柱とすることから、半分以上を雪に覆われる２学期ではなく１学期開講とすることとし、受講者は日本人学生10名、留学生（日研生）10名の計20名を定員とし、授業を開講した

2. 授業の内容

筆者はこれまで2013・2014年度と２回にわたりこの授業を提供してきたが、昨年度（2013年度）は新渡戸カレッジ創設初年度ということもあり、日本人学生の受講者が３名と少なかった。留学生からは、日本人学生と一緒に授業が受けられると思っていたのに残念との声も多く聞かれたが、特に日本人学生の受講者数は、他の全学教育科目同様、担当者が直接調整できるものではない。特に初年度は、新渡戸カレッジ生の募集や入校の決定に時間を要したため、かれらにうまく履修を促すことができなかった。

以下では、昨年度はじめて提供した授業の内容・方法等をもとに改善を施した今年度（2014年度）の授業について紹介する。今年度の受講者数は、日本人学生（新渡戸カレッジ生）10名、留学生（日研生）９名であった。また、留学生の国籍は（こちらで調整したわけではないが）、中国、ロシア、タイであった。

この授業の目標・到達目標は、以下のとおりである。

授業の目標：

本講義では、普段生活している大学や札幌を、自らのフィールドワークにより、特定の視点から深く掘り下げ、説明することを目標とする。また、それらの過程をとおして、リサーチ（特に質的研究）に必要とされるスキルや態度、グループワークやプレゼンテーションを行うに際し求められるスキルの習得を目指す。なお、本講義は、担当者による講義のほか、受講者によるプレゼンテーション、グループワーク、ディスカッション等により構成される。

到達目標：

(1) フィールドワークに必要なスキルおよび態度について、理解することができる。

(2) プレゼンテーション・スキル、グループで協働するスキル、異文化理解力を伸ばす。

また、具体的な授業スケジュールおよび内容は、以下、表1のとおりである。なお、これは、実際の活動を大まかに示したものであり、シラバスに記載したとおりではないことを予め断わっておく。

表1　2014年度　授業スケジュール

日　程	内　容
①（4／14）	ガイダンス
②（4／21）	自己紹介・他己紹介
③（4／28）	フィールドワークとは ★課題「大学の『国際化』を表している写真の撮影」
④（5／12）	大学・キャンパスをフィールドワークする①
⑤（5／19）	フィールドワークの手順と方法(概説)
⑥（5／26）	大学・キャンパスをフィールドワークする②
⑦（6／2）	フィールドワークの基礎的スキル①：観察
⑧（6／9）	札幌をフィールドワークする① ★テーマ…わたしたちが考える「札幌」
⑨（6／16）	フィールドワークの基礎的スキル②：面接（実際に練習）
⑩（6／19）	フィールドワークの基礎的スキル③ ：研究倫理と役割のとりかた、資料の整理
⑪（6／23）	札幌をフィールドワークする②
⑫（6／30）	札幌をフィールドワークする③
⑬（7／7）	ポスターづくり①
⑭（7／14）	ポスターづくり②
⑮（7／28）	総括

初回の授業では、シラバスに基づき、この授業の目標や内容、評価方法等を確認した。また、グループ活動を中心に進める授業であることの理解を促すため、札幌とのかかわりや札幌に対するイメージを各自三つ挙げてもらい、それをグループで共有する活動を行った。2回目の授業でも、自己紹介・他己紹介に時間を割き、同じグループになるかもしれない授業の履修者同士が互いを知る時間をとった。また、これまでの担当者の経験か

ら、異なる背景を持つ人々が集まりともに活動を行う上で配慮すべき事項を、「この授業での約束事」としてまとめ、資料として配布し、確認し合った（参考資料１参照のこと）。この授業では歴史的・政治的事象および話題を取り上げることは多くはないので、出身国・地域やこれまで受けてきた教育に起因する葛藤が受講者間で生じる可能性は少ないと考えたが、授業内での質疑の仕方、グループ活動へのかかわり方等については事前に確認しておいた方がいいと考え、あえてそのための時間を割くこととした。

３回目の授業では、フィールドワークとは何かについて概説し、その遂行に求められる準備や道具等について、受講者とともに考えた。翌週がゴールデンウィークにかかり次の授業まで約２週間の時間があることから、受講者一人ひとりが「大学およびキャンパスの『国際化』を表しているもの」を各自写真撮影し、各自その理由を考えてくることを次回の授業までの課題とした。４回目の授業では、グループに別れ、それらの写真の整理を行い、各自が考える「国際化」の定義を考えた。最終的に６回目の授業までに各自１枚の写真を選定し、授業内でその選定理由およびそこから考えたことを一人３分で発表してもらった。

５回目の授業でフィールドワークの手順と方法を、人類学やエスノグラフィー等の手法をもとに概説した後、７、９、10回目の授業で観察、面接、フィールドでの役割の取り方と研究倫理について、実践を交え学習した[2]。「観察」では、一定期間にわたりある場所で観察やインタビューを行いそこから見えてくるその「場」のいまを伝えるテレビ番組を視聴し、一か所にとどまって見る・聞く・考えることをとおして見えてくるものを議論し合った。９回目の授業では、グループにわかれ面接の練習をし、10回目の授業では、主に事前調査の大切さ、面接の際の注意事項やメールや電話でアポイントメントをとる際に気を付けること等、実際にフィールドワークを行う前に知っておくべきことを講義形式で周知した。

11回目の授業以後の４回の授業は、フィールドワークのための事前準備やフィールドワークの結果得られた内容を共有する活動にあてた。テーマは、「わたしたちが考える『札幌』」とし、グループで「札幌」を最も表していると考えられるものについて調べ、ポスター形式で発表することを課題とした。ともにフィールドワークを行うグループのメンバーの決定は、６回目の授業時の「国際化」を表す写真の発表の内容や通常の授業での態度および履修者の性向等を考慮し、授業担当者が振り分けた。一方、各グ

ループでのフィールドの選定や調査手順・方法等の具体的な内容については、各グループで決定した。活動のなかでは、グループごとに互いの構想を発表し、意見をもらう時間も設けた。

3. 学生によるポスター発表と総括

授業の総括として、2014年度は7月22日から1週間、完成したポスターを国際本部1階のロビーに掲示し、授業やイベント等で国際本部を訪れる学生・教職員に、その成果を披露した。昨年度は、学生の都合等を勘案し、一日のみではあったが、昼休みの時間帯を利用して、30分間のポスター発表の機会を設けたが、時間的制約から授業履修者である日研コースの留学生や教職員以外の聴衆を集めることが難しかったため、今年度は期間を長くし一定期間掲示することにより、多くの人の目に触れることを優先した。

今年度は六つのグループによりそれぞれ、セイコーマート、札幌地下歩行空間ちかほ、札幌テレビ塔、札幌の道路の特徴、北海道神宮、サッポロ・ビール園をフィールドとした調査が行われ、それらが1枚のポスターにまとめられた。

例：札幌地下歩行空間

例：さっぽろテレビ塔をフィールドとしたポスター

ポスター作成までの活動では、各グループで、授業後もしくは休日に時間を決めて集まり、フィールドに少なくとも１回以上は赴き、そこで見えてきたものをかたちにするための情報収集を行うよう、注意を促した。あるグループは、フィールドで会った人の話をもとに、量的・質的データの収集を行った。また、あるグループは自分たちが気づいた疑問点等をまとめ、電話やファックス、メールで関係者・機関にインタビューを行った。テーマ設定の性質上、札幌の紹介に終始する危険性を回避するため、各グループがフィールドとして設定した場所・立ち位置から見たときに現われる「札幌」の特徴を抽出できるよう、必要に応じ介入を行った。

ポスター発表の様子は、国際本部担当者が運営する大学の英語版ＨＰにも、学生の声とともに紹介された。また、最後の授業時には、活動の総括として、他のグループのポスターを鑑賞することにより気づいた、自分たちの活動および作品の振り返りを、小レポートとしてまとめ、提出してもらった。

なお、授業の評価は、①通常の授業（そのための準備・復習時間含む）への積極的参加、授業内での発表および提出物、②フィールドワークの成果物としてのポスター、③授業最終回の振り返りの小レポートを柱に、それぞれを点数化し行った。

4. 受講者アンケートにみる本授業の意義と課題

多文化交流科目では、科目開発・改善のため、毎学期、独自にアンケート調査を実施している。この授業でも、昨年度に続きこの調査に参加したが、その内容は、学生がこの授業をとおしてどのようなスキルを身に付けたと考えているのかを自己評価により問うものであるため、学生の「捉え方」に従い、ばらつきがある。先に言及したように、各グループの構成員の決定は担当教員が行っているため、特にグループのなかでの役割分担やグループの統率については、各自の責任感とも関係して人により認識や内省が異なるように思われる。

ある日本人学生は、自由回答の欄で、以下のような感想を述べている。

> 自分の会話力のなさを痛感した。外国人とグループを組んでディスカッションをしたとき、日本人の自分がきちんと進行したり、意見を述べたりできなかったのは情けなかった。でもそれも回を重ねるごと

に少しではあるが上達した。(後略)

また、別の日本人学生も、ポスター作りの際に留学生との協力がうまくいかず、そのことをきちんと伝えられなかったことに反省を示していた。それに対し、留学生からは、日本人学生がもっと自分の意見を表明すべきことも指摘されている。グループでの作業については好意的な評価も多いが、今後は、グループでの協働作業をより円滑に進めるための工夫等を提示する必要性も検討すべきかもしれない。

ただ、日本人学生・留学生ともに、うまくいった点、うまくいかなかった点の双方を含めて、異なる価値観、多様な考え方に触れられたことはよかったと、多くの履修者が評価していた。特に、日本人学生からは、「日本人同士だけではできないような話の内容(文化の違いなど)ができるのは楽しい」との感想も示されており、個に還元されない「多文化」交流科目の意義が感じられた。

5. 今後の授業展開に向けて

これまで2年間の授業提供のなかで、授業の内容や成果発表の方法等、多少にわたり改善を行ってきた。今後は、これまでの成果をもとに、多文化交流科目をとおして身に付けることを期待する、コミュニケーション能力や異文化理解力、リーダーシップ等の汎用的能力をいかに学生に意図的・自覚的に育成できるかを検討し実践していきたい。そのために、来年度は、ポスター作成を最終目標とするグループワークや発表のためのルーブリックを作成し、その活用を試行できればと考えている。また、学生のモチベーション向上のために、学外の施設等でポスター発表等が行えるよう、地域との連携も検討できればと考える。

【註】

1 具体的にモデルとしたのは、関根康正「フィールドワークへの招待——写真観察法」日本文化人類学会監修/鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山工編『フィールドワーカーズ・ハンドブック』世界思想社、2011年。

2 主に参考としたのは、上記ほか以下の文献である。箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際:マイクロ・エスノグラフィー入門』

ミネルヴァ書房、1993年。箕浦康子編著『フィールドワークの技法と実際Ⅱ：分析・解釈編』ミネルヴァ書房、2009年。佐藤郁哉『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』新曜社、1996年。山泰幸／足立重和『現代文化のフィールドワーク入門：日常と出会う、生活を見つめる』ミネルヴァ書房、2012年。佐藤和久『フィールドワーク2.0：現代世界をフィールドワークする』京都文教大学文化人類学ブックレットNo. 8、風響社、2013年。R・エマーソン／R・フレッツ／L・ショウ著、佐藤郁哉／好井裕明／山田富明訳『方法としてのフィールドワーク：現地取材から物語作成まで』新曜社、1999年。

【参考資料１　この授業内での約束ごと】

一般教育演習　札幌を「フィールドワーク」する×日本の社会・文化

2014.04.21

この授業での７つの約束ごと

授業を効果的に進めるため、以下のことがらは、みなさんで守るよう、努力してください。

1. 授業中の、私用のための携帯電話・スマホの使用（facebook、メール、SMS チェック等含む）は禁止します。

2. 授業中、飲み物を飲んでもいいです。ただし、食べ物は食べないでください。みなさんで話し合いをしてもらうことが多いと思いますので、ガムをかむのもやめましょう。

3. 授業では、積極的に発言しましょう。わからないことがあったらそのまましないで、教員の説明の途中でも、質問してくださって構いません。

4. ただし、他の人が話しているときには、最後まで聞きましょう。

5. 発言をするときには、ちょっと次のことを考えてください。
   - 人種・民族・エスニシティ・宗教・性別等に差別的な内容の発言ではありませんか。
   - 判断基準がわからないときは、自分がその人の立場だったらどうかを考えてみましょう。
   - 内容だけではなく、伝え方についても配慮できるといいですね。
   - このクラスには、日本語が母語ではない人もいます。専門用語や難しいことばでは、うまく伝わらないこともあるかもしれません。なるべく簡単なことばでコミュニケーションをとるように、こころがけてみませんか。

6. 授業のなかで、政治的な話題、文化や宗教にかかわる繊細な問題を扱うこともあります。そこでみなさんの議論がかみあわなくても、それがお互いの関係性を規定する（決める）ものではありません。そこはしっかりと理解しておきましょう。授業のなかで起こったことは、授業のなかだけで、教室の外に引きずるのはやめましょう。

7. この授業では、授業時間外での ELMS の活用を予定しています。みなさんの積極的な参加を期待しています。

あおき　まいこ（留学生センター准教授）